

韓国の情報リテラシー教育と情報倫理教育の現状

Fact of Information Literacy and Information ethics Education in Korea

韓 炳來*¹, 姜 洪在*¹, 江島 徹郎*², 梅田 恭子*², 野崎 浩成*²
 Byoungrae HAN*¹, Hongjae KANG, Tetsuro EJIMA*², Kyoko UMEDA*², Hironari NOZAKI*²

*¹ 晋州教育大学 学校 Computer 教育科, 数学教育科

*¹ Dept. of Computer Education, Chinju National University of Education

*² 愛知教育大学 情報教育講座

*² Dept. of Informatics and Communication Technology, Aichi University of Education

Email: raehan@cue.ac.kr

あらまし：社会の各分野でのコンピュータの普及により，情報リテラシー教育が重要になっている。韓国では1980年代後半から，小中学校にもコンピュータ教育を実施している。韓国の情報教育課程は認識教育，プログラミング教育，応用ソフトウェアの活用教育，問題解決力向上教育の順に変わってきた。情報機器の急速な発展に伴い，情報通信コミュニケーションの教育と情報倫理教育が重要な部分を占めている。今後は，情報の処理過程に基づいての計算的思考力を向上させることにその中心点が移動している
 キーワード：情報教育，韓国，情報倫理教育，情報リテラシー

1. はじめに

コンピュータの発展は，社会全般に拡散され，コンピュータは，生活全般に渡って使用されている。コンピュータを学ぶことは社会と疎通する重要な技術であると言えるだろう。Wing (2006) は，計算的思考がすべての人のため必要であると主張して，基本的な教育3R(読み取り，書き込み，数え)に加え，4番目の要素として教育すべきだと主張している⁽⁶⁾。

一方，韓国では，多くのユーザーがサイバースペースに接続し，さまざまな社会問題を引き起こしている。教育者らは，サイバースペースでの倫理教育が重要であることを認識し，情報倫理教育を強調してきた。本稿では，韓国の情報教育の変遷過程を見ながら，今後の情報教育の中心的な分野の変遷について議論する。

2. 韓国の情報教育の変遷

韓国の学校における情報教育の変遷過程は，教育課程のモデルを中心に見ることができる。韓国の情報教育は，コンピュータの認識教育モデル教育，プログラミング教育モデル，応用ソフトウェア活用教育モデル，ICTを活用した問題解決力向上モデルの順に発展してきた⁽¹⁾⁽²⁾。

2.1 コンピュータの認識の教育モデル

韓国のコンピュータ教育の開始時期に相当する。この時期には，コンピュータの特性を理解することを教育の目標とした。

2.2 プログラミング教育モデル

この時期は，1970年代後半に該当する。すべてのコンピュータの学習者のプログラミング作成能力を習得させて，自分に必要なプログラムを自ら開発して使用するようにした時期である。プログラミング作成能力を育つことを教育の目標とした。

2.3 応用ソフトウェアの活用教育モデル

1987年，韓国文教部は「コンピュータ教育強化方案」を発表した。パーソナルコンピュータの発達とともに，一般ユーザーが頻繁に使用するプログラムが，商業的に開発された時期である。この時は，応用ソフトウェア活用する能力を育つことを教育の目標とした。

2.4 ICTを活用した問題解決力向上モデル

2000年代のインターネットの発達と様々な形態の情報機器が開発された時期である。この時期は，ICTを活用して，学習者の問題解決能力を向上させることを目標とした。学校現場の準備不足のために，ハードウェアの普及により重心を置いて実施し，学生の思考能力(問題解決力)の育成にはある程度の限界があった。

2.5 計算的思考力の向上

コンピュータ科学の発展の過程には多くの科学者，技術者，数学者らの努力があった⁽³⁾。コンピュータサイエンスが独自の学問分野に発展する過程で形成された独特の考え方である計算的思考をコンピュータサイエンスを中心に育てなければならないということを強調する時期であると理解することができる。

2.6 リテラシー教育と情報倫理教育

リテラシー教育は、韓国のコンピュータ教育の始まりから実施されたと判断することが望ましい。しかし、情報倫理教育は、パーソナルコンピュータの普及以降の時期である、応用ソフトウェア活用教育モデル以降の時期として見るのが望ましい。特に、インターネットの急激な普及により、学生らがゲームに没入するような現象が現れ始めた 2000 年以來、重点的に実施された。韓国のコンピュータのコースを見ると、より明確に示されている。

3. 韓国の情報教育の領域

3.1 ICT 活用のガイドライン

1998 年に発足した金大中政権は ICT 活用を奨励した。

2000 年には「小、中等学校情報通信技術教育運営指針」を公表⁽⁴⁾した。その内容領域は以下の 5 分野に分かれている。「情報の理解と倫理」、「コンピュータ基礎」、「ソフトウェアの活用」、「パソコン通信」、「総合活動」。総合活動は、4 つの領域を統合して活動することであり、重要な内容は、総合活動を除いた領域にあった。その中で、情報通信技術が社会に与える影響に関する領域である「情報の理解と倫理」は、そのタイトルが示すように、倫理教育がその内容の半分近くを占めていた。

2005 年には情報通信技術教育運営指針が改訂され、発表された⁽⁵⁾。この指針は、小学校 1 年生から高校 1 年生までを 5 つの段階に分け、それぞれの段階を 5 つの領域に分けて、達成すべき事項を示したものである。その領域は、「情報化社会の生活」、「情報機器の理解」、「情報処理の理解」、「情報加工と共有」、「総合活動」で構成された。倫理上の領域は「情報化社会の生活」領域に含まれた。

3.2 情報通信倫理教育の内容

韓国において、情報倫理教育が強く進められるようになったのは、ネット中毒と呼ばれるほどにコンピュータを利用することに起因すると考えられる学生の逸脱行為と、サイバー空間での犯罪行為の増加が原因であると考えられる。現行の情報倫理教育の内容は、インターネットの逆機能（有害情報、中毒、プライバシーの侵害、サイバーテロ、詐欺、著作権侵害、ウイルス被害）を中心に扱っている。特に小中学生を対象にした場合には、生活の規範、ルールに関連する中毒現象、個人情報保護、言葉の暴力、著作権侵害、ウイルス被害、個人情報保護を中心に扱う。

しかし、情報技術の特性によって表示される技術的な現象や、哲学のような深みのある内容についてはまだ扱っていない。

4. 示唆

情報教育は、コンピュータ科学技術が社会的に広がっていく状況に応じて中心の内容を変更して発展してきた。

コンピュータ認識教育モデル、プログラミング教育モデル、応用ソフトウェアの活用モデルは、コンピュータ技術がコモディティ化されて個人的に普及される過程に現れた現象であると言えよう。

現在のコンピュータ教育は、情報科学を中心とした独自の領域を確立していく過程である。韓国のコンピュータ教育は、情報教育にその名を変え、情報処理の過程そのものにより焦点を置くようになってきた。また教育面では、情報科学の内容よりも、情報処理機器を利用するユーザーの思考プロセスに、より焦点を合わせてきたことを示している。

参考文献

- (1) イテウク (1999). コンピュータ教育論. 良いソフト.
- (2) ギムヒョンベその他 (2012). 情報教育論. 教育科学社.
- (3) 韓炳來 (2012). 情報教育と計算的思考. 情報教育学会学術論文集第 3 巻第 1 号, pp. 57-62.
- (4) 教育人的資源部 (2000). 初・中等学校情報通信技術教育運営指針.
- (5) 韓国教育學術情報院 (2005). 初・中等学校情報通信技術教育運営指針の改正案と解説書. 研究報告書 RM 2005-51. 韓国教育學術情報院.
- (6) Wing, J. M. (2006). Computational Thinking. C ACM, vol49 (3), pp. 33-35.